

クリスマス・キャンドル

星のカナリア



聖なる夜。寒空の下。
華やかなケーキ屋さんの前を通るとき、私には少し勇気がいる。小さな子どもを連れだした若い夫婦やカップルが、幸せそうに丸いケーキを抱えて出てくるからだ。
私の頬に、木の葉のように、ひとひらの雪が降ってきて、火照った体が寒さでツンとなる。幸せそうな人たちの合間を縫うように歩きながら、この季節の私は、人波の中にKを探すが日課になっている自分に気付く。

その頃の私は、小さなケーキ屋さんでケーキを作るパートタイマーとして働いていた。
明日はクリスマススイブというその晩、パートを終えた私は、一階建ての貸家に帰った。
夜中の十一時を過ぎて、イブまであとすこしという微妙な時間帯だった。外から自分の部屋を見上げると、煌々と明かりが灯っている。
Kが来てくる！

私は、心を弾ませて、一階への階段を上った。
私の足音が聴こえていたのだろう、扉を開けるとKがいて、さっそへコートの上から私をふわりと抱きしめてくれた。
「く、おかえり」と言う彼の着ているセーターがらは、何となく匂の野菜や味噌汁といった温かい家庭の匂いがした。

「き、き、奥さんと一緒に食事してきたの？」
私が聞くと、Kは微笑みながら答えた。
「君のためにぼくが自分で作ったんだよ。あと、

十分弱でクリスマススイブだ」
「私、丸いケーキが食べたいわ」
駄々をこねる少女のように私はKの座っている一人用のソファに近寄って、彼の手を包み込んだ。

Kは石像の彫刻家で、大学の非常勤講師だった。五本の繊細な指に触れる度に、私は、むかしその大学の学生だった頃に見た、正面玄関に置かれている女性の裸体の石像を思い出す。その石像は、一途に恋する想いの強さを、全身で語っていた。
私が石像を熱心に眺めていたとき、当時は先生と呼んでいたKが偶然通りかかり、
「二科展で入選した初めての作品なんだよ」と、少年のように笑いかけて、受賞当時の喜びを語ってくれた。

それがきっかけだった。
Kからすすめられるままに私は、友達といっしょに大学の別館にあるアトリエまで遊びに行くようになった。

アトリエに置かれているいろいろな道具などがもの珍しくて、椅子の代わりになりそうな石の上に乗っては、石をへらへらさせて遊んでいた。

Kの着ている白いマイシャンはいつも皺だらけで、彼女や奥さんのいるような気配は、全く感じられなかった。あんな素敵な石像を彫る先生は、どんな人なのかしら、と、私は、Kのことが気にかかるようになっていた。

ある日の昼休み。ひとりアトリエに行ってみ

ると、私の友達に、Kのシャツの皺を伸ばしながらアイロンを掛けていた。友達は、まさにKから口説かれていたところだった。

「君は僕の初恋の人に似ている。良かったら、モデルになってくれなうか。」

Kは、耳まで真っ赤にして、どもりながら口説いていた。

卒業してすぐ友達はKと結婚した。

私は二人の新婚家庭にもよく遊びに行っていたが、Kが自宅にいないことが多くなり、いつのまにか足が遠のいていった。

あとでわかったのは、結婚してからのKが家庭よりも美術にお金を使うような生活だったことである。かつての私の友達にKとの不仲が原因で他の男性と遊んでいるという噂話まで、私の耳に入ってきた。

そんなある日、思いがけなくKから電話があった。内緒で妻の携帯を見て私の番号を調べたと言いつつ、相談相手になって欲しい、と、いろいろなことを打ち明けられた。

そうして個人的な付き合いが始まった。

あの晩、イブまでのカウントダウンが始まった頃のことだ。Kが、

「僕は君に、どんなケーキよりも素敵なクリスマスのお奇跡を起こしてあげられる」と、冗談っぽく笑いながら言った。

私は、「どんなお奇跡？」と尋ねた。

氷水が変わるように、このキャンドルも、芯が燃え尽きれば、わずかに残った乳白色の蠟が冷たく固まるだろう。

笑って誤魔化せるような年齢はとっくに過ぎていく。

大学で、二人の噂が流れ始めた頃に完成した、友達達の石像を、美術館で見たことがある。そのとき私は、束の間の落胆の後、諦めの安堵感が生まれるのを感じた。あの石像を見たときに、私は、Kへの憧れにヒリオトを打ったのだ。

私は、キャンドルの炎を自分で吹き消した。

「私ね、貴方と奥さんのことを知り尽くしているから解るのよ、今ならまだ間に合うの。彼女のものとへ戻ってあげて……。私も、これ以上利用されるのはいやよ」

Kと私は最寄りの駅まで、寒空の中を歩きながら話し合っていた。

「僕の心は相談相手という形でしか、愛するてだてを知らない君が、じじひじひと思えて、すくなく愛しかったんだ」

無理矢理の作り笑いをしながら打ち明けてくれたKの、優しい断片が悲しかった。不毛の関係が終わらせるための私の言葉は、Kの最後の優しさを傷つけてしまった。

最終列車を逃したKは、私のすすめに従って彼女へのメールを打って行く。淋しと思えば二度とさせないよ。いつとも一緒に寄り添って暮らして

そうして時計が十二時ちょうどを指したそのときだった。

家中の電気が消えてしまったのである。

目を丸くしている私をよそに、Kは、あははは……と高らかに笑い、そのあとで言った。

「昨日、回覧板が君のいなうとき「回ってきてね、君にはわざと内緒にしておいたけど、この時間に停電になるっていう連絡事項が書かれていたんだよ。単なる偶然だね」

私が呆然としてみると、Kは暗闇の中で戸棚からキャンドルの箱を取り出してきて。

最初の一本に火を点けて、銀の燭台に乗せる。揺らめく炎と静寂がKと私の間にあった。

ふじ、Kが言った。

「このキャンドルも朝までには燃え尽きるだろうね。Y、それまでの間、彼女の代わりに僕の手をずっと握っていてくれなうか。」

しかし私は、何も答えられずに黙っていた。とっさに思い浮かんだのは、キャンドルの炎が燃え尽きたあとの不安だった。

大学のアトリエで、顔を真っ赤にして私の友達を口説いていたK。彼女の卒業を待ちかねていたように妻として娶ったK。にもかかわらず妻には関心を示せなうってしまったK。

Kと私の間にあるこのキャンドルが燃え尽きるときには、Kの心も冷めてしまつのではないだろうか。

雪だるまが、やがて木の枝と雨天の実を残して

いじゅう……

始発の列車が来た。ホームまで見送りに入った私に、Kは「ありがとう」と言いつつ、列車に乗る前に、また私のほうを振り返った。

列車の中と外に、透明に隔てられた二人の距離が、永遠の別れを告げている。ドアが閉まり、Kの自宅の方向に向かう列車が走り出した。

列車を見送った私の心には、暖かく優しい幻想が生まれていた。

Kが乗った列車には、ある駅から、疲れた顔の彼女が乗り込み、Kの繊細な指に、彼女の指を絡めている。

そんな二人の安らぎの時間を包み込むように、キャンドルの炎が暖かく見守っている。

プラットホームに降り立つ彼女の肩を抱くKの白いコートが、朝焼けの光に染まる。

幸福そうに微笑みながらKが、朱鷺色の空を見上げていく。

次の年の聖夜。

空のピンクっぽい雲を見るたびに、彼の未来を託した日を思い出していた私は、一年前と同じ仕事場へ歩いて行った。

小さな丸いケーキ。大きな丸いケーキ。窓の向こうに見えるクリーム色の幸せに憧れている無邪気な子どもたちにも、切ない大人たちにも、お金では買えない夢を売るために。